



TITLE:

成人涙道系におけるリンパ組織の
組織測定的研究,とくにその分布に
ついて(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

キヨ, セイハ

CITATION:

キヨ, セイハ. 成人涙道系におけるリンパ組織の組織測定的研究,とくに
その分布について. 京都大学, 1967, 医学博士

ISSUE DATE:

1967-11-24

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/212372>

RIGHT:

氏 名	許 清 波 きよ せい は
学 位 の 種 類	医 学 博 士
学 位 記 番 号	論 医 博 第 396 号
学位授与の日付	昭 和 42 年 11 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	Histometrische Untersuchung der lymphatischen Gewebe im Tränensystem des adulten Menschen, insbesondere ihre Verteilung (成人涙道系におけるリンパ組織の組織測定的研究、とくにその分布について) (主 査) 教 授 堀 井 五 十 雄 教 授 西 村 秀 雄 教 授 岡 本 道 雄
論文調査委員	

論 文 内 容 の 要 旨

本研究で、著者は正常な成人3例を対象として、結膜囊を含めた、涙道系全域に及んで、リンパ装置の發育と分布を、連続切片標本を通じて、組織測定的に精査、次の成績を得た。

1) 成人の涙腺では、いたるところ、リンパ装置の良好な発達をみとめ、これらはリンパ浸潤或いは孤立小節の形をとって、腺基質に分布する。また後者の一部には二次小節の形成或いは明中心の分化をみとめうる。さらに、被検涙腺を通じ、リンパ装置の發育は、質・量ともに、腺小葉内部で集中的に發揮され、ここから小葉間質に向って急速に低減、或いは消退する。かかるリンパ装置の發育状態を、文献的知見、すなわち鳥類（三和）、一般哺乳動物（小松原）、猿類（欧李）のそれに照合すると、涙腺リンパ装置は、動物が高等になるにつれて、漸次、小葉外から小葉内部に向って、移動・集する系統發生的推移を示す。

2) 次に成人の瞼結膜を検するに、きわめて豊富なリンパ装置が、リンパ浸潤や孤立小節のような未分化装置の形、および著大なパイエル型集合小節の形で見出され、前者では、いたる所瞼結膜全体に及ぶ普遍性分布が目立ち、後者は上瞼域で、可動性結膜部のみに、限局的な発達を示す。文献によると、鳥類や一般哺乳動物では、未分化リンパ装置が上瞼の可動性結膜に集中的な分布をなすが、集合小節の形成は下瞼域で、可動性結膜部に限局する。さらに猿類になると、上瞼の可動性結膜のみに、集合小節の發育をみとめ、未分化装置の方は、眼瞼全体を通じ、結膜可動部に普遍的に散布する。以上の所見を総合すると、瞼結膜に登場するリンパ装置は、動物進化とともに、漸次その全域にわたって拡大分布する發育機転を、比較解剖学的に明示する。

3) さらに、成人の球結膜をみると、リンパ装置はリンパ浸潤或いは孤立小節の形をとって、その可動部の全体にわたって普遍的に分布する。かかる所見は猿類におけるそれと完全に軌を等しくするが、鳥類や一般哺乳動物の場合には、造生分布の重点が球結膜の鼻側域に傾く。

4) 終りに成人の固有涙道全体について通覧するに、リンパ装置はリンパ浸潤、孤立小節および広汎な

集合小節の形で強く発達、しかも質・量ともに涙嚢壁に集中して最大の発育度を示し、ここから涙道の首側或いは尾側に向って漸減分散する。文献によると、鳥類では鼻涙管の鼻腔開口部で本装置の最高の発達をみとめ、また猿類を含めた哺乳動物にあっては、鼻涙管の上端部、すなわち涙嚢隣接部で集中的な発育を示す。

以上のように、固有涙道のリンパ装置は、動物が高等になるにしたがって発育度の優位は、漸次涙嚢域に向って移動する系統発生的推移を、強く示唆する。

5) 以上の所見を要約をするに、成人の正常涙道系の全体を通じ、リンパ装置の発現と分布は、比較解剖学的立場から深い起源に立脚するものと結論しうる。

論文審査の結果の要旨

一般にある器官におけるリンパ装置の分布と発生の正常妥当性は当該個々の材料の吟味はもちろん必要不可欠ではあるが、さらに厳密な比較解剖学上の位置付けが証明されなければならない。著者は事故死による正常人体材料についての涙道系リンパ装置の研究において、その得られた知見をさらにじゅうらいの他動物において得られたものと比較検討し比較解剖学上の位置付けを行なったものである。

1) ヒト涙腺リンパ装置はリンパ浸潤ないしは孤立リンパ小節の形をとって現われ、小葉内を中心として優性に認められ小葉間質に向って急速に減少する。比較解剖学的に吟味すれば涙腺リンパ組織は動物の進化とともに小葉内部に向って小葉外から集中移動する傾向を示す。

2) ヒト眼瞼結膜ではリンパ装置はリンパ浸潤、孤立リンパ小節、集合リンパ小節の形をとって出現するがリンパ浸潤や孤立リンパ小節のような比較的未分化なリンパ装置は眼瞼結膜全域に普遍的分布を示すが、集合リンパ小節は上眼瞼可動性結膜部に限局分布する。比較解剖学的には動物の進化とともに眼瞼結膜リンパ装置は全域にわたって拡大分布する傾向を示す。

3) ヒト眼球結膜リンパ装置はリンパ浸潤、孤立リンパ小節の形をとって出現するが、この態度は比較解剖学的にみれば眼瞼結膜のばあいと同様であり、鳥類や一般哺乳類ではその鼻側域に集中、サル、ヒトに至って普遍的分布を示すようになる。

4) 固有涙道リンパ装置はリンパ浸潤、孤立小節、集合小節の形をとって出現するが、ヒトでは涙嚢壁に質、量ともに最高の発達を示し、首側および尾側に向って消退する。比較解剖学的にみると固有涙道リンパ装置は動物の進化とともに涙嚢壁に集中移動する傾向を示す。

5) 以上要するにヒト涙道系の全体を通じてリンパ装置の分布と発生は、比較解剖学的に深い起源に立脚した組織であることがわかる。

以上本論文は学問的に有益であって医学博士の学位論文として価値あるものと認定する。